

KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センターニューズレター vol.13 (2023 年度)

IMÁGENES DE IBEROAMÉRICA

EL CENTRO DE ESTUDIOS IBEROAMERICANOS



La Virgen de Guadalupe (México)

目次

公開講座

2023 年 6 月 8 日（木） ICC ホール & オンライン

推しの監督と仕事をするためにチリに行ったけど、1 カ月でクビになるまでの話
—（無理やり）になりたい職業に就く方法—

林 かな（映像翻訳者／世界ワーカー）
（関西外国語大学スペイン語学科卒）

**La precuela de irme a Chile a trabajar con mi director favorito, hasta que me despidieron
después de un mes: Cómo conseguir el trabajo que quieres (forzadamente)**

HAYASHI, Canna (Traductora)
(Graduada del Departamento de Español de Universidad Kansai Gaidai)

1

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1834>

2023 年 6 月 23 日（金） マルチメディアホール & オンライン

バスク・ディアスポラ、ヨーロッパから世界へ
—激しい民族運動から美食の国に—

梶田 純子（関西外国語大学）

Diáspora vasca, de Europa al mundo:

De un fuerte movimiento nacionalista al país de gastronomía

KAJITA, Junko (Universidad Kansai Gaidai)

6

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1855>

第 16 回スペイン語教授法研究会

2 de julio de 2023, domingo ONLINE / 2023 年 7 月 2 日 (日) オンライン

Dificultades de aprendizaje en el aula de español como lengua extranjera: evidencias y pautas de actuación

SALA CAJA, Lidia (Universidad Provincial de Aichi)

外国語としてのスペイン語授業における学習困難 ― 実例と解決方法 ―

サラ・カハ, リディア (愛知県立大学)

11

連続公開講座

メキシコ先住民のリアル

― 独立から現代に至る抵抗の 200 年 ― (全 3 回)

第 1 回 2023 年 10 月 13 日 (金) マルチメディアホール & オンライン

メスティソの国メキシコという虚構の解体

― 先住民民族ぬきのメキシコはもういない ―

小林 致広 (神戸市外国語大学名誉教授 / 京都大学名誉教授)

Deconstrucción de la ficción que México es una nación mestiza:

nunca más México sin pueblos indígenas

KOBAYASHI, Munehiro

(Profesor emérito de Universidad de Estudios Extranjeros de la Ciudad de Kobe /

Profesor emérito de Kyoto Universidad)

18

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1961>

第 2 回 2023 年 10 月 26 日 (木) 5206 教室 & オンライン

ユカタン・カスタ戦争の終焉と終わりなき抵抗

― 近代メキシコを生きるマヤ人の再領土化戦術 ―

初谷 譲次 (天理大学)

El fin de la Guerra de Castas de Yucatán y la resistencia sin fin:

las tácticas de reterritorialización de los mayas en el México moderno

HATSUTANI, Joji (Universidad de Tenri)

23

<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=1979>

第3回 2023年11月9日(木) 5206教室 & オンライン

メキシコのサパティスタ運動

—たかさんの世界からなる世界を求めて—

柴田 修子 (同志社大学)

The Zapatista movement in Mexico: A World where many worlds fit

SHIBATA, Nobuko (Doshisha University)

29

.....
<https://www.kansai-gaidai.ac.jp/news/detail/?id=2017&cat=2>

教員エッセイ

Poemas budistas publicados en japonés por los jesuitas en el siglo XVII

en la Biblioteca del Real Monasterio de San Lorenzo de El Escorial, Madrid

TRONU MONTANÉ, Carla (Universidad Kansai Gaidai)

エル・エスコリアル王立修道院図書館所蔵の

17世紀イエズス会士により日本語で出版された仏教詩

トロヌ・ムンタネー, カルラ (関西外国語大学)

..... 34

表紙: グアダルーペの聖母 (メキシコ)

公開講座

2023 年 6 月 8 日（木） ICC ホール & オンライン

推しの監督と仕事をするためにチリに行ったけど、
1カ月でクビになるまでの話
—（無理やり）になりたい職業に就く方法—

林 かな （映像翻訳者／世界ワーカー）

（関西外国語大学スペイン語学科卒）

**La precuela de irme a Chile a trabajar con mi director favorito, hasta que me
despidieron después de un mes:**

Cómo conseguir el trabajo que quieres（forzadamente）

HAYASHI, Canna (Traductora)

(Graduada del Departamento de Español de Universidad Kansai Gaidai)

Resumen:

Me ingresé en un departamento de español por casualidad. A partir de ahí, he perseguido lo que quería no tan excesivamente hasta que finalmente llegara a trabajar con mi director favorito. No voy a decir cosa tan ingenua como “Si lo deseas, ¡todos tus sueños se harán realidad!” pero hablaré mi ensayo y error para acercar al sueño. Si me queda tiempo, hablaré sobre la traducción de los subtítulos y manera de sobrevivir como freelance.

推しと仕事をする

全オタクの夢とまでは言わないが、少なからず夢想したことがあるオタクは多いのではないだろうか。2015 年に推しの監督こと、アレハンドロ・ホドロフスキーの「エンドレス・ポエトリー」の撮影現場に参加した私が好きなことを仕事にして、さらに推しと仕事をするに至るまでどのような過程を辿ってきたのかを話したい。



林 かな氏 （2023 年 6 月 8 日）

最初のきっかけは高校受験に失敗したことだった。受験に失敗したことで、地元滋賀から京都の高校に通うことになり、そこから映画を見始める。最初は新聞社に勤める父が試写状や招待券をくれるままに見ていたが、生来のマイナー趣味が高じてそのうち京大の西部講堂やライブハウスで行われる自主上映にも足を運ぶようになった。もし第一志望の高校に受かっていたら、このような展開にはならなかったはずなので、落ちてよかったとわりと早い段階で思った。人生において最初は悪いことに思えても、結果的にはいいことも多い。“人間万事塞翁が馬”という故事が実感できた初めての体験だった。おかげで、その後の人生で自分が望んだ結果が出ないときに、毎回「結論はまだ分からない」とか、「後で結果的によかったと思うのかもしれない」と思う癖がついた。こう考えることでたいいの失敗は失敗ではなくなり、チャレンジへのハードルが下がるので、いつも何かを思いついたらとりあえずやっている。

高校時代は映画監督を目指したが、映画作りは一切せず。大学は映画学科、監督コースを受験するがまたしても不合格。滑り止めとして受けた当大学に入学することになった。スペイン語学科を選んだ理由は、まだその頃は英米語学科とスペイン語学科の二択の時代だったのだが、ビクトル・エリセの「ミツバチのささやき」という映画でスペインの別の顔を知り、なんとなくスペインも面白いかもしれないと思ったからである。上京できなくなったこと、映画とは関係ない学部に入ったことから、映画とのつながりが欲しくてマイナー上映会を通じて知った自主上映会や自主製作をやっていた京都のグループにボランティアスタッフとして加わる。自主上映会では主にモギリ、自主製作のほうではチラシのイラストを描いたりしていた。まだ単なる廃坑の無人島だったころの軍艦島に一週間の泊まり込みロケに行ったのはいい思い出である。

このころ日本で続けてホドロフスキーの3作品が公開され、衝撃を受ける。また企画上映の舞台挨拶などで来京した俳優や監督たちとの打ち上げに参加する機会も多くあり、相手が有名人であっても会いたい人には会えるという感覚が身に付いた。このことが後に会えそうだと分かれば、とりあえず会いに行くことにつながっている。ちなみにゼミは翻訳を選び、課題としてエリセのパートナーであったアデライダ・ガルシア・モラレスの「El sur」を訳したのはまったくの偶然だが、今となっては深い縁を感じる。ただしこの時点では翻訳を仕事にするつもりはまったく頭になく、映画にかかわる仕事として配給会社を志望するようになる。そして学内の留学生試験もやっぱり落ちた。

時代はバブルの最後期だったので本来ならば就職活動は難しくなかったはずだが、始めたのが4年生の6月ごろと遅かったせいか、気づけばすでに採用は終わっている様子だった。そこで個人留学にあっさり方向転換をして内定のないまま卒業。1年間ホテルの配膳

のバイトをして留学資金を溜め、3年生の春休みに訪れたヨーロッパで特に気に入ったバルセロナを目指すのだが、その前に3カ月だけ比較的学費が安かったマラガでホームステイをしながらインテンシブコースを受講。当時はまだインターネットがない時代だったので、情報源は「地球の歩き方」の留学編が頼りだった。マラガではアートシアター系の映画館がなく、ハリウッド映画はすべて吹き替えられていたのでフラストレーションが溜まる。

バルセロナに移動。ときは1992年。オリンピックとセビリア万博があったため物価とレートが急上昇しており、節約のために公立の語学学校 *Esucuela Oficial de Idioma* に入学。同時にスペイン語で何かを習えば一石二鳥と考えて写真の学校にも入る。これによって週に5日×2時間は語学学校、週に2日×2時間は写真学校に通うというゆるい留学生活が始まった。時間はたっぷりあったので、アートシアターと名画座通いが復活。10カ月を過ぎたころにやっと留学生活の手ごたえを感じ始めたので、1年の予定だったがもう1年延長することにした。このころ学校の掲示板で日本語の翻訳者募集の張り紙を見つけて応募。張り紙は連絡先が切り取れるように、下のほうに電話番号が書かれた切り込みが入ったよくあるタイプだったが、この仕事を誰にも取られたくなかったため、張り紙ごとにはがして持ち帰り応募した。無事に採用され、漫画の下訳で翻訳者としてデビューする。もし応募者多数で試験的なものがあったら、また落ちていた可能性があるのでは、欲しいものがあるなら、時として手段を選ばないことも必要なのである。



林かな氏（中央）とホドロフスキー監督（右）

1994年帰国。帰国直後に建都1200年のイベントの一環でこの年のみ東京国際映画祭が京都で開催され、「ジョニー100ペソ（公開時のタイトルは「ひとりぼっちのジョニー）」のチリ人監督のグスタボ・グラフ・マリーノ監督のアテンドをする。その後、どう就職につながればいいのか分からず、実家でブラブラしていたが、ひょんなことから父親の知り合いが通訳・翻訳者をあっせんする会社をしていることを知り、そこでバイトを始める。仕

事のほとんどが警察や検察での通訳の派遣で、被疑者がスペイン語圏出身者のときは自分で行った。（このころは無謀にも自分のスピーキングの実力が分かっていたからできた）この辺りから少しずつ字幕翻訳の仕事がしたいと思うようになり、通信教育で翻訳を学び始める。最初は箸にも棒にも掛からなかったのが、そのうち成績優秀者のところに名前が出るようになり、もしかしていけるかもと思い、映画の字幕をやるなら東京に行くしかないと思うようになる（現在は、素材はインターネット経由で送られてきて、在宅で仕事をするので日本のどこにいてもできるのだが、当時はまずはコネクションが必要だし、何かあれば駆け付けられる場所にいることが必要だと思っていた）。

1997 年上京（講演では 98 年と言ったが計算が合わなかった）。派遣で働きながら翻訳の学校に通うのだが、コネクション作りも兼ねて通っていたのに、先生から嫌われていたため、このルートで仕事を得るのは難しいと悟る。ちなみに同期生の何人かは通いの弟子として下訳から始めて、その後デビューした。学校が母体となっている翻訳者ネットワークのトライアルでも、何度受けても B+ 止まりで結果が出せず（何度か A 判定を取ると翻訳者として登録され仕事が斡旋される）このまま続けると劣等感の塊になりそうなので、翻訳者ネットワークを辞め、独自路線を探ることに。

30 歳まであと数か月というときに、何の目処も予兆もなかったが 30 歳のうちにデビューすることを本気で決心する。そして実際に 30 歳のうちにマラガで同じ語学学校に通っていた友人からの依頼で映像翻訳者としてデビューすることができた。ちなみに 2 本目の仕事は監督のアテンドをした配給会社からの依頼である。おそらく多くの人があるジャイアントステップまでの期間に何があったのか不思議に思うだろう。自分の実感としては決心しただけだ。運がよかったと言われればそれまでだが、留学先でマラガに行ったことや、アテンドしたことなど過去の自分とつながっているので、行動した結果ともいえる。腹をくくって本気で取り組んでいると、ときどきこういう幸運が訪れるのだが、再現性が低いので何の説得力もない。残念だ。

そんなふうにして 15 年ほど兼業や専業で映像翻訳を続けていた 2013 年、推しの監督ことホドロフスキーが 23 年ぶりに撮った新作がカンヌ映画祭で上映されたこと、ある日本の配給会社を買ったことを知る。その会社とは取引がなかったが、一度名刺交換をしたことを思い出し、売り込みのメールを送ったら、「リアリティのダンス」の字幕を担当することに。そこからの縁で、2015 年に「エンドレス・ポエトリー」が日本との合作で作られることになったとき、日本人美術監督の通訳として 3 カ月の予定でチリへ行く。結局は 1 カ月でクビになるのだが、オタクの夢がかなった瞬間と言っていいのではないだろうか。

最後に夢をかなえるためのヒントを挙げておきたい。

*** 自分の性格を見極める**

世の中にあまたある成功するための方法も、自分の性格に合わないものは続けられない

*** 現在地を知る**

客観的に自分を見ることで足りないところや伸ばすべきところが分かる

*** やりたいことは口に出す**

一見、関係なさそうな人にも話すことで、巡り巡って縁がやってくることもある

*** いったん名乗ってみる**

ある種の言霊信仰だが、口に出すことで自己暗示をかける

*** とりあえず行動する**

一歩踏み出せば、踏み出す前には見えなかった進むべき二歩目が見えてくる

*** 早い段階で失敗しておく**

失敗は意外と失敗じゃないことが分かるし、失敗しても最終的に成功にすればいいだけ

*** 人との縁は大切に**

ほとんどの仕事は人が運んでしてくれる

*** 機嫌よく、ほがらかに**

自分がどんな人と仕事をしたいかと考えたら、おのずと答えは出る

*** 目先の利益にとらわれない**

学生時代たくさんボランティアでただ働きしたことが、大人になって実を結んだ

(ただし、ボランティア現場でやりがい搾取されないように注意すべし！！)

*** 自分の頭で考える**

持っている能力、スキル、人脈、性格はそれぞれ違うので、自分に合った方法にカスタマイズするには自分で考えるしかない

子供の頃から何でもやりたいタイプだったので、分かっていなかったが、やりたいことがない人は無理に見つける必要はない。でも、やりたいことがある人のヒントになれば幸いである。

公開講座

2023 年 6 月 23 日（金） マルチメディアホール & オンライン

バスク・ディアスポラ、ヨーロッパから世界へ —激しい民族運動から美食の国に—

梶田 純子（関西外国語大学）

Diáspora vasca, de Europa al mundo:

De un fuerte movimiento nacionalista al país de gastronomía

KAJITA, Junko (Universidad Kansai Gaidai)

Resumen:

"Euskadi", que ahora se extiende entre España y Francia, nunca ha sido “una nación” desde el principio de los tiempos. En España, surgieron grupos nacionalistas a finales del siglo XIX debido a la afluencia de no vascos, y bajo la dictadura de alrededor de 1960, surgieron grupos que hicieron campaña por la independencia de España en medio de la persecución.

También hay muchos vascos que, por diversas razones, llegaron a América desde la época de los Descubrimientos. ¿Qué hacen los descendientes vascos en América?

Al mismo tiempo, muchos turistas del mundo venían a España, a visitar el País Vasco, descubrían su pintoresco entorno natural y su gastronomía. Además, sus deportes rurales, festivales, música y danza también atraen a la gente.

はじめに

バスク（地方）とは、スペインとフランスに跨る地域で、有史以来、国家として成立したことはないが、特殊な文化、言語、容姿、強い民族主義、経済的優位から、スペインの他地域とは一線を画してきた。

そして、バスク人は「バスク・ディアスポラ」と言うほど、南北アメリカを中心に、各地へ移動・移住した。

その時期、理由は様々であるが、移住先で、「バスクの家—バスク・センター」を作り、そこに集まり、情報交換、活動をしている。

また近年「バスク」は、過激な民族運動、そこから生まれた過激派と呼ばれたグループが有名だった。しかし現在は、そのグループが解散宣言した後、過激な行動もなくなった。そのため、バスクの観光資源に世界中の観光客が集まり、特に美食のレベルの高さが、多くの人々を魅了している。

1 「バスク」

「バスク（地方）」は元々、7つの領域を指し、現スペインでは、アラバ、ギプスコア、ビ

スカヤ、ナバーラの4県（地域）が「バスク自治州」と「ナバーラ自治州」に分かれている。フランスでは、ラプルディ、低ナファロア、スベロアの3地域が、ピレネー・アトランティック県の1部に含まれている。

「バスク」を表す名称は、主に3つの語が使用されている。まず、「エウスカル・エリア」“Euskal Herria”で、これは上記の7つの領域を表す。

次に「エウスカディ」“Euskadi”、これは19世紀、バスク民族運動創始者サビーノ・アラナ（Sabino Arana）が創出した造語で、7つの歴史的領域を指す語だったが、今は、主として「バスク州」の3つの領域（県）を指す。

最後は「 Pais・バスコ」“País Vasco”（バスクの国）であるが、これは、非バスク人（スペイン人）が使用する語で、フランス語“Pays Basque”からのカスティーリャ語（スペイン語）訳だと言われており、スペイン内で、“País（「国」の意）を使う唯一の州であるため、他地域の人から、批判的に見られることもある。

州都は、ゲルニカ憲章（バスク自治憲章）に書かれているわけではなく、実質上の州都として、ビトリア＝ガステイスに自治州議会や州政府機関が置かれている。これも、1979年当時、バスク語が殆ど使用されていなかったアラバ県の県都ビトリア（バスク名ガステイス）に州都的機能を持たせることを、意識的に行ったと言われる。その成果は現れており、現在、同地ではバスク語使用者が増えた。



梶田 純子氏 （2023年6月23日）

2 民族主義とゲルニカ バスク地域主義（ナショナリズム）

2-1 サビーノ・アラーナ（Sabino Arana）のバスク民族運動

バスク民族主義の父と言われるサビーノ・アラーナ（1865-1903 年）が、カタルーニャ民族運動に刺激を受け、「バスク民族主義」を初めて掲げ、スペインからの独立を主張した。

アラーナのいう「バスク民族」とは、7つの領域に共通する「血統」、「宗教」、「言語」であった。

彼は、重工業の発展により、バスク外のから労働者がバスクへ流入したことへの反発と、カルリスタ戦争の結果のフエロ（慣習法／地方特権法）が廃止されたことから、立ち上がった。

1でも述べたように、「エウスカディ」という語を創り出しただけでなく、バスク（国）旗「イクリーニャ“ikurriña”」も考案した。これは、当初バスク民族党（PNV）党旗であったが、現在はバスク自治州旗としてだけでなく、その他の「バスク（地方）」でも掲げられている。

2-2 「ゲルニカ」“Guernica”と“Gernika”

「ゲルニカ」と聞かれると、すぐにピカソの絵を思い浮かべられるだろうが、その題材は、1937 年 4 月 26 日バスクの小さな町ゲルニカが、史上初の都市無差別攻撃を受けたことに起因する。スペイン内戦中に起きたこの爆撃は、当初フランコ反乱軍が、「バスク人の自作自演」との噂を流した。実際は、ドイツのコンドル空挺団と 1 部イタリア空軍によるものだった。ゲルニカの町は、代々の領主や州首班/知事が、櫟の木の下で、「フエロ」遵守を誓う、自治の象徴的な場所だったため狙われたと思われたが、軍事工場や重要な道路に架かる橋があったため、狙われたと言われている。

当時の町の人口は約 4-7000 人だったと推測されているが、不幸にもその日は市が立つ日で、近隣の村から農作物も人も集まっていた。死者数は不明だが、後に、フランコ派学者（10-200 人）と反フランコ学者（1000-2000 人）では、全く異なる数字を発表した。

このニュースは、スペイン内では、情報統制されていたが、当時パリ万博のスペイン館の画絵制作依頼（スペイン共和国政府より）をされていたパリにいたピカソが耳にし、この大作を描きあげた。万博終了後、展示会出展のためヨーロッパを回り、アメリカへ渡り、そのままニューヨークで保管された。フランコ死後、米西間で話し合われ、1981 年マドリーのプラド美術館に返還された。1992 年には、マドリーの中心街に開館した「ソフィア王妃芸術センター」へ移管される。バスク人は現地への展示を願ったが、叶っていない。今、ゲルニカの町には、『ゲルニカ』（の絵は）、ゲルニカ（の町に）」というスローガンが掲げられている。国連や日本でもレプリカが、平和のシンボルとして、戦争の惨さを伝えている。その後、ゲルニカは、ドイツの謝罪を受け、同地に平和博物館が開館した。

2-3 バスクの現状、州首班／知事（レンダカリ）

バスクでは州のトップ、つまり首班/知事のことを、「レンダカリ“Lehendakari”」と呼ぶ。「1 番目の役割の者」という意味である。1936 年内戦勃発時のレンダカリは、ホセ・アントニオ・アギーレ（José Antonio Aguirre）で、フランスからドイツへ、さらに南米と逃亡生活を送った。その後、アメリカ合衆国、フランスへと移って行く。その間、バスク亡命政府を作り、外からフランコ政府に反対していたのだが、パリで客死した。

その流れを汲むバスク州の現レンダカリは、2012 年よりイニーゴ・ウルクリュ（Iñigo Urkullu）で、アギーレと同様、バスク民族党（PNV-EAJ）党首だった元教員である。

バスク州は、1979 年に自治州となってから、サビーノ・アラナ達により結党された穏健民族主義党と言われるバスク民族党からレンダカリが選出されている（2009-2012 年を除く）。

一方、ナバーラ州は、保守的な右派が多く、バスク自治州への加入を反対し、1982 年にナバーラ県 1 県でナバーラ自治州となった。以後、全国政党の中道右派の PP（国民党）と連携している地域政党（UPN）や中道左派の社会労働党と連携しているナバーラ社会党から州首班が選出されてきた。

しかし 2015 年、バスク民族党などから結成された選挙連合「ゲロア・バイ」（Gbai）が、他の左派系政党と協力し、ウシュエ・バルコス（Uxue Barkos）を、ナバーラ自治州初のバスク民族主義首班「レンダカリ」に選出した。ナバーラ州において、バスク文化やバスク語普及を進めた。次の州首班は、マリア・チビーテ（María Chivite）で、社会労働党（PSOE）と連携したナバーラ社会党党首である。（2019 年より現職）

3. バスク・ディアスポラ、「バスクの家—バスク・センター（Centro vasco-Euskal etxea）」

バスク州政府公認の「バスクの家（バスク・センター）」は、世界 25 カ国、191 ヶ所あり、そのうちアルゼンチンに 82 ヶ所ある。

バスク地方外（外国）に出たバスク人たちは、「バスクの家」に集まり、相互扶助、維持してきた文化や政治を、そのまま受け継いだ。その「バスクの家」の 1 番大事な基本方針は、バスク地方外でバスクの伝統を普及することだった。

アルゼンチンでは、1877 年ブエノス・アイレスに初めての「バスクの家」「ラウラック・バット（Laurak bat）」が設立された。その目的は、アルゼンチンにおけるバスク文化の基本的価値観とバスクにおける「フエロ」を維持することであった。

「スペイン内戦」では、バスク救済のために組織化し、自由と未来を求めアルゼンチンに移住してきたバスク人同胞を受け入れ、援助した。と同時に、アルゼンチン全土に「バスクの家」創設を促進する。以後約 140 年間に、アルゼンチン全土で、100 の「バスクの家」ができた。どのセンターにも、バスク人や子孫が集まり、言語・舞踊・歌を習い、食事会や勉強会などを開催している。

現在、アルゼンチン人口の 10%が、バスク人またはその子孫であると考えられており、歴代のアルゼンチン大統領も 12 人がバスク系である。

アルゼンチンのバスク（系）人は、ルーツの「バスク」に愛着を持ち、複雑なバスク語を習いたい、文化継承をしないと、コロナ禍でも活動をやめなかった。内陸部は、むしろ活発化している。

4. 美食の国（食文化）

過激と言われたバスク民族運動が下火になり、「バスク祖国と自由 ETA」が解散宣言をすると、世界中から観光客がバスクを訪れ、バスクの食を堪能するようになった。スペインの「ミシュランの 3 つ星」11 軒のうち、4 軒がバスクにあり、また、“The World’s 50 Best Restaurants”でもバスクのレストランが 3 軒入っている。

高級料理店のみならず、手軽に飲食できる店のレベルも高く、「ピンチョス」発祥の地と言われるバスクのイメージは一変した。

近年は、逆に、バスク地方でオーバーツーリズム問題が顕著となり、再び、新たな民族運動を生み出さないように願っている。



梶田 純子氏 （2023 年 6 月 23 日）

第 16 回スペイン語教授法研究会
ENCUENTRO ONLINE

2 de julio de 2023, domingo

**Dificultades de aprendizaje en el aula de español como lengua
extranjera: evidencias y pautas de actuación**

SALA CAJA, Lidia (Universidad Provincial de Aichi)



Decimosexta reunión de investigación
sobre la didáctica del español

Open workshop in Spanish. Learning difficulties in the Spanish as a
foreign language classroom: evidence and guidelines for action.

**Dificultades de aprendizaje en el
aula de español como lengua
extranjera: evidencias y pautas de
actuación**

Lidia Sala Caja
Universidad Provincial de Aichi

En clase no todos los estudiantes rinden igual. Como docentes, advertimos
que algunos, aunque manifiestan sincero interés por el aprendizaje del
español, no consiguen el progreso deseado, que les cuesta adquirir
conocimientos. El taller se dedica a este grupo, muchas veces olvidado. En
primer lugar, conoceremos qué se entiende por *dificultad de aprendizaje*,
después observaremos algunas de sus características y al final
discutiremos cómo podemos apoyar al alumnado que las presenta.

2 de julio de 2023 (domingo)
14:00-16:00, Japón

Vía Zoom

Inscripción: bit.ly/3VpEypF
Contacto: pilar-vi@kansai-gaidai.ac.jp

QR code

Cartel del encuentro online

Recientemente hay una mayor atención entre el profesorado, los investigadores y las instituciones educativas hacia los estudiantes con necesidades especiales de aprendizaje, que pueden presentar dislexia, TDAH, TEL, TEA, sordera, etc.

El objetivo del taller fue conocer mejor la naturaleza de la dificultad de aprendizaje del español como lengua extranjera entre los estudiantes japoneses universitarios: se dieron algunas pistas para una detección temprana, se presentaron los factores individuales y extrínsecos que contribuyen a ella y se ofrecieron algunas medidas encaminadas a reducirla. Una “dificultad de aprendizaje” se define como un “desajuste entre procesos de enseñanza y aprendizaje” (Badia 2012:18). Un estudiante con una dificultad de aprendizaje es aquel que se encuentra en un contexto de enseñanza-aprendizaje que le plantea “una distancia excesiva entre la demanda de una tarea de aprendizaje” y su competencia para resolverla adecuadamente (íd.).

El concepto de dificultad de aprendizaje integra factores individuales y del entorno, se concibe como algo temporal que puede ser revertido, no discrimina (cualquier estudiante es susceptible de sufrir una dificultad de aprendizaje) y prevé intervenciones, en el aula o a nivel curricular e institucional, para remediar y prever la dificultad.

Se presentaron los resultados de un estudio llevado a cabo en 2018 entre 78 alumnos de entre 18 y 21 años de la carrera de español de la Universidad Provincial de Aichi. En este estudio se recogieron datos sobre la organización curricular, el profesorado, los materiales didácticos y el sistema de evaluación, se realizaron entrevistas semi-estructuradas a siete estudiantes con bajo rendimiento y se realizó una auto-observación y registro del proceso de enseñanza y aprendizaje.

Se observó que algunos estudiantes no rinden (no progresan en su aprendizaje de español) como sus pares, a pesar de dedicarle tiempo y esfuerzo, y sus profesores no consiguen evitar que esto suceda, lo que indica que existe una dificultad de aprendizaje y que las necesidades educativas de una parte

del alumnado no se llegan a cubrir.

Entre los estudiantes de español, se observa que el estudiante presenta un estado de interlengua retrasado con respecto al que presentan otros aprendices que han estado expuestos a sus mismas condiciones de enseñanza-aprendizaje. Se dan errores llamativos (por inusuales o permanentes) como errores de concordancia entre verbo y sujeto (*yo trabaja en un restaurante*) o atribución categorial entre sustantivos y adjetivos (*El apartamento es comodidad*), por ejemplo. Otros predictores de bajo rendimiento para la detección temprana son la lectura de palabras en voz alta (leen con interferencias persistentes de grafía-fonema de otra L2, con lentitud o con demasiada rapidez, con finales de palabras inventados, con pausas no esperables dentro de sintagmas, con entonación antinatural o monótona, con esfuerzo, etc.) y la dificultad de recordar secuencias fónicas largas (como *correo electrónico*).

En cuanto a los factores individuales, lo normal es que el estudiante ya haya tenido dificultades con el aprendizaje del inglés, y es consciente de sus dificultades con la gramática, que centra en los errores de concordancia sujeto-verbo y en la elección del tiempo verbal.

En cuanto a los factores extrínsecos que intervenían en el mantenimiento de la dificultad en la asignatura de conversación, se encuentran las evaluaciones muy frecuentes, la obsesión por cumplir la programación, la escasa estimulación de los mecanismos de autorregulación, el trabajo cooperativo mal planificado o ejecutado, las demandas poco ajustadas en actividades de alto nivel cognitivo, la falta de ayudas específicas para los estudiantes con dificultades y el *feedback* simple o reduccionista.

Las medidas propuestas para disminuir la dificultad son las siguientes:

- 1) Aprovechar los cambios en la legislación educativa para llevar a cabo adaptaciones curriculares.
- 2) Ofrecer apoyo fuera de clase a estudiantes que presenten bajo rendimiento.
- 3) Proporcionar a todos los profesores información para facilitar la detección temprana y el seguimiento de los estudiantes con probable mal rendimiento.
- 4) Identificar y seguir a los estudiantes con riesgo de presentar bajo rendimiento a través de entrevistas personales, análisis de errores de producciones orales y escritas y test de aptitud.
- 5) En la asignatura de conversación, realizar ajustes en el sistema de evaluación y en las programaciones, ofrecer ayudas específicas para estudiantes con bajo rendimiento y proporcionar un *feedback* más versátil.

En cuanto a las estrategias de apoyo para disminuir la dificultad y rebajar la ansiedad, se proponen las siguientes medidas:

- 1) Prever si una situación de clases puede generar ansiedad (leer en voz alta, preguntas como ¿qué crees que siente/piensa?)
- 2) Establecer criterios de evaluación que estén menos centrados en el resultado y más en el proceso (hablar sin pausas, dar información interesante a los compañeros, ensayar antes).
- 3) Ofrecer *feedback* constructivo y alentador, que no enfatice solo las carencias sino también los logros conseguidos
- 4) Detectar a los aprendices a los que con más probabilidad pueda afectarles la dificultad: realizando juegos y actividades que pueden servir para observar sus fortalezas y debilidades

y practicando la producción oral y escrita en clase (no en casa), para poder detectar errores llamativos auténticos.

5) Alimentar la motivación promoviendo el apoyo entre pares y el apoyo del docente.

6) Prestar atención al formato de los libros de texto, exámenes, notas en la pizarra, etc. (fondo, tipo de letra, tamaño de letra, etc.) así como a la manera de redactar los enunciados.

7) Proporcionar estrategias para la autorregulación y el aprendizaje autónomo.

Por último, para aumentar el rendimiento, es efectivo:

- 1) Asegurar la correcta adquisición de la forma fonológica y ortográfica de las palabras.
- 2) Fomentar la conciencia fonológica, morfológica y sintáctica.
- 3) Optar por la enseñanza explícita de la gramática y del léxico.

Como conclusión, es importante resaltar que la atención a los estudiantes con dificultades (con o sin un trastorno del desarrollo subyacente) forma parte del quehacer docente, por lo tanto, es conveniente identificarlos lo antes posible ya que con medidas de apoyo se favorece el éxito de su aprendizaje. La formación del profesorado sobre los trastornos y las dificultades de aprendizaje es fundamental.

BIBLIOGRAFÍA:

Badia, Antoni (coord.) (2012). *Dificultats d'aprenentatge dels continguts curriculars*. Barcelona: UOC.

Baralo, Marta (2009). A propósito del análisis de errores: una encrucijada de teoría lingüística, teoría

de adquisición y didáctica de lenguas. *Revista Nebrija de Lingüística Aplicada a la Enseñanza de Lenguas*, 5, pp. 27-31.

Kormos, Judith, 2016. *The second language learning processes of students with specific learning difficulties*. Taylor & Francis.

Kormos, Judith, 2017. The effects of specific learning difficulties on processes of multilingual language development. *Annual Review of Applied Linguistics*, 37, pp. 30-44. Disponible en: http://eprints.lancs.ac.uk/85578/1/MB_aral_JuditKormos_final.pdf

Kormos, Judith (2020). Research timeline: Specific learning difficulties in second language learning and teaching (eprint)

Disponible en

<https://eprints.lancs.ac.uk/id/eprint/149016/1/KORMOSResearchtimeLineSpLDAuthorversion.pdf>

Lavine, R. Z. (2013). Las discapacidades específicas del aprendizaje en las clases de idiomas extranjeros. *Mirada hispánica*, (6), 115-134.

Yokoyama, Y. (en prensa). Evidencias sobre la motivación del inglés (L2) y del español (L3) en una universidad japonesa a través de entrevistas, *Creatividad, innovación y diversidad en la enseñanza del español como LE/L2*, Esther Álvarez García y Milka Villayandre Llamazares, eds. León: Universidad de León.

要約

外国語としてのスペイン語授業における学習困難 —実例と解決方法—

サラ・カハ, リディア (愛知県立大学)

昨今、教育研究機関における失語症や多動性障害をはじめ、様々な困難を抱える学生への対応必要性は増すばかりである。外国語学習に興味関心を示しつつも、思うように語学力の向上に繋がらない学生は一定数存在し、授業を進めていく中で置き去りにされがちな存在でもある。今回のワークショップでは、日本人学生が外国語としてのスペイン語を学ぶ上で抱える困難さに焦点を置き、愛知県立大学でスペイン語を学ぶ18歳から21歳までの78名の学生を対象に2018年に実施された調査結果をもとに、早期発見の為のポイント、学習困難の学生個人に由来する、あるいは外来的な要因、困難さを解消する為のいくつかの方法が提示され、多くのオンライン参加者と共に議論を深めた。本ワークショップを通して、学習困難の軽減や解消には早期発見が肝要であり、学習困難を抱える学生への対応は教員側に欠かすことのできない務めであるという意識を共有した。(発表要約:砂原由美)

連続公開講座
メキシコ先住民のリアル
—独立から現代にいたる抵抗の 200 年—（全 3 回）

第 1 回
2023 年 10 月 13 日（金） マルチメディアホール & オンライン

メスティソの国メキシコという虚構の解体
—先住民族ぬきのメキシコはもういない—

小林 致広（神戸市外国語大学名誉教授／京都大学名誉教授）

**Deconstrucción de la ficción que México es una nación mestiza:
nunca más México sin pueblos indígenas**

**KOBAYASHI, Munehiro
(Profesor emérito de Universidad de
Estudios Extranjeros de la Ciudad de Kobe /
Profesor emérito de Kyoto Universidad)**

Resumen:

La ficción de que México es un estado mestizo, "de una sola nación y cultura", se ha mantenido desde la Revolución Mexicana a principios del siglo XX, pero este proyecto utópico aún no se ha hecho realidad. La diversidad cultural de los pueblos indígenas, considerado como objetos a borrar bajo el indigenismo, que integraba a los pueblos indígenas en el estado mestizo, empezó a tolerarse gradualmente, pero los pueblos indígenas nunca fueron reconocidos como sujetos constitutivos del Estado Mexicano. El levantamiento armado de los pueblos indígenas en Chiapas en 1994 cambió significativamente esta situación. En mi presentación, expondré la realidad de que México no es una sola nación sino un Estado en el que existen, oprimidas, muchas naciones.

10 月 12 日はコロンブスの「アメリカ発見」の日として 1980 年代初頭までラテンアメリカ諸国で祝賀され、メキシコでは 1928 年から 1980 年代初頭まで Día de la Raza（人種／民族の日）として祝賀されてきた。しかし「アメリカ発見」500 年（1992 年）が間近になった頃から異議申し立てが出され、2020 年には Día de la Nación Pluricultural（多文化国の日）と改称された。このことはメキシコの国家としての在り方が革命後の 100 年で大きく変換したことを示唆している。

独立前のメキシコは、支配層の白人（イベリア半島生れと現地生まれ）、インディオと呼ばれた先住民、混血のメスティソ、強制移住させられた黒人（ムラートも含む）という社

会集団（カスタ）で構成されていた。1793 年の資料ではインディオ 6 割、メスティソ 2 割、1857 年の人口調査ではインディオ 5 割、メスティソ 3 割という構成だったが、革命後の 1921 年の第 1 回センサスでは混血（mezclado）6 割、インディオ 3 割という構成で、メスティソが最大多数派となっていた。これと並行する形で、メスティソこそ真正のメキシコ人という意識が支配的になっていた。



添付写真 1：10 月 12 日は多文化国の日（ナワ語表記）

多数派だが弱者のインディオを隔離・庇護する植民地期の体制は独立初期も続いていたが、やがてカスタに基づく特別処遇（差別）は近代的国家の法の精神に抵触するとされるようになった。メキシコを近代国家にするには、白人とインディオという敵対的な二人種／民族が同じ領域にいる植民地的状況を克服し、同質的な文化を共有するメキシコ人を作り出すことが不可欠とされていった。メキシコの国民文化、メキシコ性を体現するのは、両者が融合したメスティソとされるようになった。社会進化論を信奉する政治家や思想家、知識人によって創られた「メスティソ＝メキシコ国民」という虚構は、テオティワカン遺跡を発掘した考古学者マヌエル・ガミオの『祖国を鍛造する（Forjando la patria）』（1916）、教育大臣だったホセ・バスコンセロスの『宇宙的人種（La raza cósmica）』（1925）など、メキシコ革命期の著作に具体的に表明されている。

「メスティソ＝メキシコ国民」という理念の枠組みでは、インディオ／先住民には消滅か、メスティソに同化するかという選択肢しかなかった。前者は「死んだインディオ」（驚嘆すべき古代文明の担い手だったマヤ、アステカなど）は「善いインディオ」であるが、「生きているインディオ」は殲滅すべきという立場である。その代表的な事例が 19 世紀半ばに起きた二つの「カスタ戦争」、ユカタン・カスタ戦争（1847～1901 年）とソノラ州のヤキ戦争（1875～1912 年）である。

19 世紀半の改革派政権、ディアス独裁政権（1876～1911 年）、さらにメキシコ革命後の歴代政権が選択したのは、インディオをメスティソに同化させる路線だった。統治者が「生きているインディオ」の問題にどう対処するかという政策は、いわゆるインディヘニスモ

(indigenismo) と呼ばれるものである。革命以降の歴代政権が採用してきたインディヘニスモは、「メスティソ国家＝メキシコ」という 19 世紀の改革自由主義派の理念を共有するものであった。インディオという「小さな祖国 (patria pequeña)」を解体し、一つの同質的なメキシコを構築しようとするインディヘニスモの至上命題は、先住民のスペイン語化や近代的生活様式の導入などを通じて、植民地時代からの隔離・孤立の植民地的状況からインディオを解放し、「メスティソ＝メキシコ国民」に統合することであった。

「メスティソ＝メキシコ国民」という理念に基づく革命後の官製インディヘニスモは、1940 年以前の同化・併合政策、1940～70 年代半ばの統合主義、そして 1970 年代半ば～2000 年の多文化主義の時代を経て、21 世紀には終焉を迎えたと言えよう。同化・併合政策では、インディオ的要素を一掃し、メキシコ市民に同化させることが最優先され、文化ミッション、農村学校、識字運動による先住民のスペイン語化という教育活動で先住民共同体の古い慣習を変更することが目論まれてきた。統合主義政策では、後進的なインディオ社会の経済や保健衛生面を改善することを通じて、インディオをメスティソ化し、国民生活に統合することが謳われていた。メキシコのインディヘニスモ機関である全国先住民庁 (INI) の初代所長 (1948～1970 年) の考古学者アロンソ・カソは、1956 年の国際学会でインディヘニスモの目的は「インディオをなくすこと」であり、20 年以内に先住民問題は解決できるとまで断言していた。官製インディヘニスモが立脚する基本的理念であったメスティソ＝メキシコ国家という虚構は、1970 年代になると大きな批判を浴びるようになる。

メスティソ国家から先住民の一掃を目指す官製インディヘニスモの展開によって、先住民の比率は着実に減少していた。先住民言語話者基準が採用されたセンサスでは、1930 年に 13.5% だった先住民言語話者率は、1970 年には 6.5% と半減し、統計的な先住民抹殺も着実に展開していた。しかし 1970 年代になると、先住民の固有文化やアイデンティティを否定する官製インディヘニスモに対する批判が巻き起こり、先住民の文化的多様性を認知する先住民参加型の自主管理開発モデルに基づく多文化主義的なインディヘニスモが提唱されるようになり、1990 年代にかけて自主独立系の先住民組織も各地で組織され、自律的な先住民運動が展開するようになる。1992 年の改正憲法第 4 条では、「メキシコ国は本源的に先住民族に基づく多文化的構成体である」と明記され、メスティソ＝メキシコ国民という虚構との決別が宣告されていた。

1992 年の先住民法改正でメキシコは多文化国と規定されるようになったが、先住民族の権利は言及されず、多民族国としては位置づけられていない。北米自由貿易協定が発足した 1994 年のサパティスタ民族解放軍 (EZLN) のチアパス州での武装蜂起を契機に、先住民族の文化や権利の承認を求める運動が展開されるようになる。1996 年 2 月の EZLN と連邦政府との「サンアンドレス合意」では、憲法での先住民族認知、先住民の政治参加、司法への全面アクセス、先住民族文化育成や教育の推進などが謳われていた。1996 年 10 月には EZLN も参加する先住民全国議会 (CNI) が結成され、「先住民族ぬきのメキシコはも

ういらない (Nunca más un México sin nosotros)」という標語が掲げられ、先住民族の統合的な再構築を目指す運動が展開されていった。



写真 2 : 2001 年 3 月、国家宮殿前の EZLN 支持集会

70 年間政権を独占してきた制度的革命党に代わり政権の座に就いた国民行動党のフォックス政権のもとで 2001 年に行われた先住民法改正では、サンアンドレス合意で謳われた内容はほとんど盛り込まれなかった。改正憲法の第 2 条では先住民族の規定は個人の自認に基づくとされているが、先住民族の自決権は「単一で分割できない国家」メキシコの統一性を損なわない形でしか行使できないものとされていた。先住民法改正が「サンアンドレス合意」を無視した反動的なものだったため、CNI や EZLN は、先住民自治の法的承認 (autonomía de derecho) でなく、「事実としての自治 (autonomía de hecho)」を構築する運動を展開していった。EZLN の場合、2003～2023 年の 20 年間で、チアパス州内に支持基盤組織で組織された反乱自治行政区を 30 近くも運営するようになっていた。CNI 傘下にあるミチョアカン州の先住民ナワのオストララン (2009 年) や先住民プレペチャのチェラン (2012 年) などで、先住民自治行政区が組織されるようになっていた。



写真 3 : ロペス・オブラドールの大統領就任式 (2018 年 12 月) の先住民権威杖の付与

2018年12月1日メキシコ市ソカロ広場で行われた就任式で、先住民代表から権威杖を賦与された現大統領ロペス・オブラドールは、政府プログラムで先住民を優先すると明かしていた。全国先住民族庁を創設し、CNIの主要メンバーだった先住民アユークの弁護士を代表に任命した。2021年にはカスタ戦争でメキシコ政府が先住民族マヤやヤキに対して犯した「非礼行為」について公式謝罪を行っている。その一方で、マヤ鉄道など先住民地域の大規模開発計画に反対する先住民に対しては、自らが掲げる推進する第4次改革(4T)を妨害する保守勢力として論難している。

多文化国と規定された21世紀のメキシコでは、先住民族に一定の自治権は認められているが、メキシコは「単一で不可分の国／国民(nación)」という枠組みは堅持されている。しかも、多様な先住民族は、一括りに先住民族(非メスティソ=非メキシコ市民)として扱われ、国家に多くの民族が存在する多民族国家(Estado plurinacional)として構想されず、EZLNの標語にある「多くの世界を内包できる一つの世界(un mundo donde quepan muchos mundos)」のように「多くの民族(naciones)を内包するメキシコ」という多民族国家の可能性はいまだ見えていない。



小林 致広氏 (2023年10月13日)

第2回

2023年10月26日(木) 5206教室 & オンライン

ユカタン・カスタ戦争の終焉と終わりになき抵抗 —近代メキシコを生きるマヤ人の再領土化戦術—

初谷 譲次 (天理大学)

El fin de la Guerra de Castas de Yucatán y la resistencia sin fin: las tácticas de reterritorialización de los mayas en el México moderno

HATSUTANI, Joji (Universidad de Tenri)

Resumen:

Tihosuco, Felipe Carrillo Puerto, Quintana Roo, a 3 de mayo de 2021, bajo la pandemia mundial del coronavirus, se informó por internet de una ceremonia en la que el presidente mexicano Andrés Manuel López Obrador se disculpó con los mayas. La ceremonia se tituló "La ceremonia de petición de perdón por agravios al pueblo maya, fin de la Guerra de Castas". La Guerra de Castas fue la mayor y más larga rebelión de los pueblos mayas en la historia de México, que duró desde 1847 hasta 1901. Sin embargo, la resistencia para los mayas no se limitó solo a la rebelión. Se adoptó una táctica de resistencia llamada "convivencia", que consistía en reterritorializar el sistema de valores impuesto por otros en su propio contexto cultural. En la conferencia, quisiera presentar la historia de la resistencia de los mayas desde la conquista hasta el presente.

自分らしく自由に生きられていますか

コロナ禍の2020～22年、オンライン授業が主流で、対面授業の機会が少なかった。学生たちに「自分らしく自由に生きられていますか」と問いかけると、苦笑する。さらに、「不自由ですよ。その原因はすべてコロナのせいでしょうか」と尋ねる。パンデミックの影響で、人びとは社会的制約を強く感じる。子供の頃、電車の中でジャンプしたことはありませんか。電車は高速で移動するのでジャンプすると壁にぶつかるのではと試してみる。自由に生きているつもりでも、社会の進行方向に飛ばされる。人生は思い通りにならないことも多く、努力や能力不足に悩むこともある。社会科学を学ぶことで、この不幸は自己責任ではないことに気づく。本日は、マヤ人の歴史について話しますが、それは遠い国の見ず知らずの人びとのことではなく、自分らしさを求めて生きる私たち自身にも関わるはずです。

メキシコ大統領がマヤ人に謝罪

2021年5月3日、メキシコ南東部キンタナロー州ティホスコ村において、ロペス・オブ

ラドル大統領は「マヤ人への暴虐に対する謝罪—カスタ戦争の終焉」と題する式典を開催し、ネットでもその一部始終が配信されました。大統領は「征服、植民地支配の3世紀間、メキシコ独立後の2世紀間、メキシコの個人や国家および外国政府によるひどい虐待に対し、マヤ人に心から謝罪する」と述べました。副題にある「カスタ戦争」とは1847年に勃発したマヤ先住民の大反乱です。大統領が謝罪した差別・虐待に対し、ときには抵抗してときには受容して「自分らしく」生きようとしたマヤの人びとの歴史と現状についてお話しいたします。



初谷 譲次氏 (2023年10月26日)

カスタ戦争とはインディオ反乱

植民地期には人種にもとづく身分制が存在し、スペイン生まれのスペイン人はペニンスラル、植民地生まれのスペイン人はクリオリョ、先住民はインディオ、白人と先住民の混血はメスティソ、白人と黒人の混血はムラトなど細かく分類され、それぞれがカスタと呼ばれます。独立したさい、啓蒙思想の影響で「法の下での平等」がメキシコ国家の理念とされこの身分制が廃止されました。その結果、支配層のクリオリョ（白人）以外は一括して「カスタス」と呼ばれるようになります。カスタ戦争は非白人の反乱ということであり、インディオ反乱と同義であるとお考え下さい。

独立（1821年）からメキシコ革命（1910年）までの期間は、各地で大小およそ200の先住民・農民反乱が記録されており、「反乱の19世紀」と呼ばれます。他方で、征服に続く植民地期は意外なことに大規模な反乱は少なく、俗にパックス・イスパニカ（スペイン統治下の平和）と呼ばれます。だからといって、植民地支配が人道的であったわけではありません。スペイン王室にとって、植民地からの利得はおもに先住民から徴収する人頭税でした。他方で、現地のクリオリョたちは、大農園や鉱山などを経営してインディオを労働力として活用したかったわけです。先行したカリブ海地域では先住民は奴隷のように酷使

され絶滅の危機にありました。インディオ人口が激減していたメキシコでは、スペイン王室は先住民隔離政策をとり現地の白人から保護します。もちろん、人道的理由からではなく金の卵を産むインディオがいなくなつては困るからです。インディオ共同体が保護されるか否かは、人頭税（金の卵）と白人事業に課される税金のバランスしだいです。前者が重いうちは保護されるという危うい平和にすぎません。独立後は資本主義経済の自由な発展が国是とされ、インディオ共同体は近代化を阻害する封建団体にすぎなくなります。白人経営の大農園による土地収奪の激化と、もはやそれを阻止する理由が国家側にないことが、19世紀メキシコが恒常的反乱状態に陥った原因といえます。

カスタ戦争勃発とうろたえる白人支配層

ユカタン・カスタ戦争の原因は、独立後に発展したサトウキビ農園による土地収奪でした。植民地期にはもっぱらスペイン産ワインを買わされていたメキシコは独立によって酒類が入荷しなくなります。その需要を満たすために熱帯のユカタン半島ではラム酒生産が始まり、サトウキビ農園が発展しました。農園に土地を奪われたマヤ人は食糧の自給が困難となり、これが反乱の主な原因です。しかし、いまだにカスタ戦争の原因はマヤ人が抱く白人への憎悪であるというイメージが根強く残っています。「白人皆殺し」のスローガンが反乱で叫ばれていたためでしょう。しかし、太平洋戦争中に日本の新聞・雑誌では「鬼畜米英」の文字が躍っていましたが、戦争の原因を憎悪だという人はいません。そこには「野蛮なインディオ」という偏見があります。カスタ戦争直前の時期の犯罪記録を調べてみました。とくに怨恨を理由として起こりがちな殺人と傷害事件をみると、マヤ人が白人を傷つける事例はとても少ないことがわかります。憎悪原因説を相対化する材料にはなると思います。

「1847年7月30日、テピチ村住民が寝静まっている明け方、インディオたちは白人、メスティソ、ムラトを皆殺しにした」という新聞記事がでました。反乱者数およそ8万人、戦死者およそ15万人、期間54年という、メキシコ史上最大のカスタ戦争の幕開けです。メンデス州知事は、ブキャナン米国国務長官に助けを求める書簡を送ります。「わが州の文明化された白人種は、一斉蜂起した土着人種に残虐かつ野蛮に攻撃されている。救ってくれた国にはわが州の領有権と主権を譲渡する」と訴えました。米国上院では大統領に軍事的支援を許可する「ユカタン法案」に関して賛否両論の激しい議論が交わされましたが、反乱の和平協定調印というニュースが届き法案は却下されました。

政府軍の反撃とイギリスの介入そして語る十字架

じっさいは、和平協定は破棄され、マヤ反乱軍は戦闘を続けていました。しかし、まもなく雨期が到来し、反乱マヤたちは農作業のため戦場を離れました。連邦政府や諸外国からの援助もあり、州政府の猛反撃が始まります。反乱捕虜は奴隷としてキューバに国外追

放されます。反乱は終局に向かうと思われたが、予想外の展開をみせます。

イギリスの介入です。ユカタン州に隣接するイギリス領ベリーズ（領有権は未確定）総督はユカタン州政府に対しマヤ先住民の独立を勧告します。ユカタン州は拒絶しましたが、イギリスによる反乱軍への武器支援は続きます。さらに、反乱マヤはあらたな宗教的庇護をえます。密林地帯に逃げこんだ反乱指導者ホセ・マリア・バレラは、セノテ（泉）のほとりに十字架が刻まれた木を見つけ、その木でクルス・パルランテ（語る十字架）を作りました。十字架は神託を告げはじめます。「敵の発砲する大砲の轟きを耳にすることはあるだろうが、けっして危害をこうむることはない。わずかな害さえも汝らにふりかかることのなきよう、余が汝らに同行する」。その地は、チャン・サンタクルス（小さな聖十字架）と呼ばれ、闘いを続ける人びと（クルソーマヤ）の聖都となります。反乱軍は十字架儀礼と教会護衛制度を軸に共同体を再編し抵抗を続けます。こうして、イギリスの援助や語る十字架の出現は反乱を活性化しましたが、分裂も招きました。語る十字架を信じないグループもいたからです。1853～99年にクルソーマヤは51回の襲撃を行いました。マヤ集落への襲撃もあり、もはやマヤ民族の一枚岩的反乱とは言えなくなりました。ついに、1901年に連邦軍が聖都に到達しましたが、クルソーマヤの姿はなく、チャン・サンタクルスは戦闘なしに陥落し、54年にわたるカスタ戦争は終結します。



図1 クルス・パルランテ教会内の至聖所と護衛役（2009年、初谷撮影）：語る十字架が発見された場所は公園として整備されており、クルソーマヤは聖地とは認めておらず撮影が可能。しかし、再領土化されつつあると筆者は考えている。

再領土化されたカトリックの祈り

ここでもう一度大統領による謝罪式典の様子を動画で見てください。式典はマヤの聖職者による祈りからはじまります。いかがでしょうか。マヤらしさを感じますね。植民地支配や国家統合をへて、なお「古来」マヤの伝統が維持されています。はたしてそうで

しょうか。注意深く祈りを聞いてみましょう。「父と子と精霊の御名において、アーメン」というフレーズが繰り返されています。私たちは科学が支配する日常生活を離れ、マヤ人の文化的営みに接するとき、無意識に「マヤらしさ」を求めてしまいます。滅亡したはずの古代マヤ文明の「神秘」は現代人には消費価値があるのです。

たしかにクルソーマヤは今なお、4つの祭祀センター（マヤ教会）において十字架信仰と教会護衛システムを維持しています。たとえば、トゥルムのマヤ教会は高いフェンスに守られ、シュロ葺きの兵舎と呼ばれる宿舎には教会護衛役が2週間交代で宿営しています。毎朝、教会最奥の至聖所（カーテンで仕切られた祭壇空間）において聖職者が祈りをささげます。カメラ、ビデオ、メモなど記録することが禁じられているクルソーマヤの宗教的営みはちょっと立ち寄っただけの観光客には不可思議な「古代マヤ」の世界に見えるでしょう。私は3年ほどマヤ教会に通って、その祈りがカトリックのロザリオの祈りであることを知りました。祈りの対象は、父なる神、イエス、精霊、聖母マリアなどキリスト教を逸脱していません。とはいえ、クルソーマヤはカトリック教会に組み込まれたわけではありません。強制的に押し付けられたカトリックの祈りを甘受しながらも相手の期待とは異なる目的で利用しているのです。マヤ古来の祈りではないのかと観光客は落胆しそうですが、本当に驚くべきは、強制された他者の祈りを自分たちの日常空間に再領土化して自らの文化資本として活用している点ではないでしょうか。



図2 謝罪式典冒頭、メキシコ（右）とガテムラ（左）両大統領の前でマヤ教会聖職者が祈りをささげる。手前にはマヤの祭壇が設置されている。会場の空気はマヤ世界に一変する。

（<https://www.informador.mx/mexico/El-Estado-mexicano-pide-perdon-a-los-mayas--20210503-0082.html>（2023年10月26日アクセス））

共生による抵抗

植民地時代、圧倒的な軍事力の差に、抵抗すれば皆殺しにされる。マヤ人たちは抑圧や価値の強要などの抗しがたい現実と共に生きるという戦術をとります。つまり、表面的には押し付けられた価値体系を受容しながら、それをみずからの顔の見える空間のなかに再領土化する。カスタ戦争は先住民反乱としては成功した武力闘争です。しかし、マヤのひとびとの歴史的主体性を反乱に限定すべきではありません。武力闘争を断念し、植民地支配が押し付けてくる価値体系を相手が期待するのとは違うかたちで再領土化する戦術にも光をあてるべきです。「カスタ戦争の終焉」は「抵抗の終わり」を意味していません。

たとえば「ゆとり世代」「リーマンショックの失われた世代」あるいは何年か後にはコロナ禍により通常の大学生活を送れなかった皆さんは「コロナ世代」などと呼ばれるかもしれません。そのすべてを「かわいそうな世代」としてひとくくりにすべきではないでしょう。抵抗しようのない制約を受けながらも、自分らしく生きようとしている私たちもマヤ人と同じなのです。マヤ人に同情するのではなく、むしろ共感し、そのしたたかさに学ぶ姿勢こそが大切なのだと思います。ご清聴ありがとうございました。

第3回

2023 年 11 月 9 日（木） 5206 教室 & オンライン

メキシコのサパティスタ運動 —たかさんの世界からなる世界を求めて—

柴田 修子（同志社大学）

The Zapatista movement in Mexico: A World where many worlds fit SHIBATA, Nobuko (Doshisha University)

Abstract:

On January 1, 1994, a group of indigenous people calling themselves the Zapatista National Liberation Army rose against the Mexican government proclaiming a revolution in the southeastern Chiapas, Mexico. But they quickly laid down their weapons and began negotiations with the government, forming a autonomous zones in Chiapas after negotiations broke down. The government, which initially aimed to suppress them by force, was forced to begin negotiations by the voices of solidarity not only in Mexico but worldwide. In this lecture, I would like to talk about what the Zapatista movement is and how it gained international support.

はじめに

あるがままの自分として居場所を持って生きていきたい。誰にとっても大切な願いだろう。それを運動のスローガンの一つに掲げ、自分たちの自治を実践してきた先住民（を中心とする）集団がメキシコにいる。1994 年にサパティスタ民族解放軍（EZLN）と名乗ってメキシコ政府に宣戦布告し、その後武器を置いてインターネットを通じて世界にメッセージを発信、メキシコ国内のみならず国際的な支持を背景に運動を存続させてきた人々である。その独特の運動のありようから「言葉を武器にしたゲリラ」や「インターネットによる運動の先駆け」などと呼ばれてきた。11 月 9 日の講座では、サパティスタ運動とはどのような運動なのか、なぜ支持を得ることに成功したのかについてお話した。まず蜂起の背景、運動の担い手、政府との交渉過程を確認し、彼らの主張を 3 つのポイントに絞って整理した。そしてメキシコ南端の「辺境地」における運動がなぜメキシコ内外で支持されるに至ったのかを考察し、最後に運動の今後の行方について簡単な展望を述べた。以下は講演のまとめである。

I サパティスタとは

1994 年 1 月 1 日に EZLN と名乗る先住民集団が、チアパス州の 7 都市を占拠した。彼

らは主にチアパス高地やラカンドン密林地域に暮らすツォツィル、ツェルタル、 Chol、トホラバル系先住民であった。州の中心的な観光都市サン・クリストバル・デ・ラス・カサス（以後サンクリストバルと表記）で「ラカンドン密林宣言」を発表し、自分たちが「500年に及ぶ闘いから生まれた」者であり、メキシコに自由・正義を取り戻すために立ち上がったと宣言した。政府はただちにチアパス州に軍を派遣して応戦したが、メキシコ各地で政府軍に反対するデモが起きて停戦を余儀なくされた。政府の空爆によって一般市民を含む 150 名以上の死者が出たとされている。

蜂起が起きたチアパス州はメキシコ南部に位置し、先住民人口が多い州である。とりわけチアパス高地とラカンドン密林地域に先住民人口が集中している。天然資源に恵まれ豊かな土地である一方、貧困が大きな課題となっていた。先住民村落における貧困は特に深刻であり、1990 年時点での識字率がメキシコでは 87.4%、チアパス州では 69.9%だったのに対し、州内の先住民居住地域では 45.6%であった。電気、上下水道普及率はそれぞれ 38.7%、38.1%、15.2%ときわめて低く、公共サービスが届いていないことが明らかであった。特にラカンドン密林地域は、20 世紀以降土地を求める先住民が自主的に入植して村を形成した地域であり、上記に加え公教育などのサービスも不足していた。さらに、政府による入植村の認定の遅れや、近隣の大規模農場との土地をめぐる争い、自然保護区の画定による入植村の排除などの課題も抱えていた。

サパティスタ運動は、厳密には先住民が始めた運動ではなく、キューバ革命の影響を受けて社会主義革命を目指す都市部出身のグループが密林地域に拠点を作ったことに始まる。彼らは先住民と接触し、1983 年にサパティスタ民族解放軍を結成した。当初参加する先住民は少なかったが、土地をめぐる紛争から大土地所有者との軋轢や政府による弾圧が激しくなるにつれて、先住民のサパティスタ支持者が増加した。交渉による平和的解決を求めている人々も加わったことから先住民が多数派を占めるようになり、その後は都市出身メンバーの離脱などを経て、1993 年に司令部として先住民革命地下委員会が組織され、先住民主導の運動となった。

1994 年の停戦後、サンクリストバル司教区の司教を代表とする仲裁委員会が立ち上げられ、交渉の枠組み作りが進められた。1995 年から先住民の権利と文化、民主主義の確立、女性の権利、福祉と開発、チアパス問題、対立の停止のあり方という 6 つのテーマについて政府との交渉が始まった。このうち先住民の権利と文化について合意に達し、1996 年 3 月に「サンアンドレス合意」が結ばれた。合意には先住民の権利を盛り込んだ憲法改正が含まれていたが、改正への動きはなかなか進まなかった。2000 年に政権が制度的革命党（PRI）から国民行動党（PAN）に移行したことで、憲法改正の機運が高まった。サパティスタは 24 名の司令官がメキシコ各地をめぐりながら首都を目指す「大地の色の行進」を行い、メキシコシティ到着後国会でも演説を行った。しかし 2001 年に改正された憲法には先住民の自治権が明記されていたものの、サンアンドレス合意を踏まえ「先住民自

身が選出するコミュニティ政府を行政主体として認める」という重要条項が削られていた。このことに抗議したサパティスタは政府との交渉を一切断ち、2003年にサパティスタ自治区に「善き統治評議会」を開設して、自分たちの問題を自分たちで解決する事実上の自治を行うと宣言した。自治区や善き統治評会のあり方は時に応じて変化しているものの、現在に至るまでこの姿勢を貫いている。



サパティスタ集会

II 何を主張したのか

蜂起した目的は、チアパス州の先住民が置かれている貧困状況を告発することである。しかしそれがチアパス州だけの問題にとどまるのではなく、メキシコにおける民主主義の不在に原因があるとして現在の政府を批判した。その後の運動の展開のなかでさまざま主張を行ってきたが、主な論点として3つ挙げられる。

一つには先住民自治である。政府と交渉が決裂する以前は、先住民文化の尊重という承認の要求のみならず、土地の再分配や集団的所有の保障という分配の要求も行っている。彼らにとって先住民自治とは、国家からの独立を意味するのではなく、先住民としてあるがままに生きられる世界を作ることである。それぞれの場でマイノリティが尊重される「たくさんさんの世界からなる世界」を構築することを意味し、世界各地のマイノリティ運動との連帯につながった。

二つめには新自由主義への抵抗である。蜂起当初は北米自由貿易協定（NAFTA）に象徴される新自由主義をメキシコ国家の主権を喪失させるものにとらえていたが、国際支援が広がるにつれ、世界の格差を拡大させる「人類に対する戦争行為」と解釈して批判するようになった。こうした主張は、反グローバリゼーションを展開する世界の社会運動の支持を獲得するものとなった。

三つめとして参加型民主主義の実践がある。2003 年に開設した「善き統治評議会」では、メンバーを各村から輪番制で選出している。「善き統治評議会」の提案は各村で話し合ってから決定することにしており、水平的なネットワークによる意思決定を目指した。これは権力を持つ人を作らず、人びとの合意に基づいてものごとを決定して行こうとする取り組みであり、「従いながら統治する」「問いかけながら進む」というスローガンで知られている。

III サパティスタ運動は、なぜメキシコ内外で支持されたのか

1994 年の蜂起後、政府による攻撃が始まった直後からメキシコ各地で攻撃中止を求めるデモが起こり、サパティスタに同情的な世論が形成された。その理由として一つには、70 年以上に及ぶ PRI による事実上の一党独裁体制のなか、政治腐敗に不満を抱いていたメキシコ人にとって、チアパス州の貧困をメキシコ民主主義の不在の問題ととらえる訴えが一定の説得力を持って受け入れられたことがある。もう一つには、明らかに劣った武器で武装した先住民を攻撃する政府軍は、弱者をいじめる権力者として国民の目に映ったことだろう。実際サパティスタの武器は貧弱で、蜂起した時点の兵士の数は 3,000 人程度だった。それに対し政府は 12,000 人を動員しており、世論の声に制止されなければ、軍事制圧は十分可能だったとされる。

サパティスタ支持の声は、世界にも広がった。それを可能にしたのは、インターネットによる呼びかけである。ラカンドン密林で書かれた彼らの声明文はサンクリストバルに運ばれ、そこからネットで新聞社に送られていた。やがて支持者によりサパティスタのホームページやメーリングリストが作成され、サパティスタの主張が直接世界の人々に伝えられるネットワークが構築された。サパティスタの主張は、新自由主義への抵抗、権力奪取を目指さない参加型民主主義の実践など、ベルリンの壁崩壊とともに方向性を見失っていた社会運動にとって、新しい運動のあり方を示すものになった。実際に世界社会フォーラムやオキュパイ運動など 2000 年代に入って展開した反グローバリゼーション運動は、サパティスタの影響を受けているとされる。またどのような人々も包摂する姿勢は、運動の支持を広げることにつながった。

結びにかえて

2003 年以降自治区の運営に力を入れてきたサパティスタは、メキシコの政治に対する影響力を持っているわけではない。しかし 2000 年代以降の先住民運動に果たした役割は大きい。彼らに続いてさまざまな先住民組織がつけられ、貧困の改善や先住民自治を求める運動が全国規模で広がった。また 2001 年の憲法改正によって先住民の自由な決定への権利が保障され、メキシコが実態として多文化主義へと移行する流れが作られたことは、サパティスタ蜂起の歴史的意義であると言えるだろう。

この講座の数日前に、サパティスタのウェブページ上で衝撃的な発表があった。「サパティスタの人々全員との協議を経て、サパティスタ反乱自治区と善き統治評議会を消滅させることが決定された」のである (<https://enlacezapatista.ezln.org.mx/>)。詳細については今後発表されるとのことで不明だが、サパティスタ全体が解散するということではない。「問いかけながら進む」過程における発展的な「消滅」であることを願っている。



柴田 修子氏 (2023 年 11 月 9 日)

教員エッセイ

Poemas budistas publicados en japonés por los jesuitas en el siglo XVII en la Biblioteca del Real Monasterio de San Lorenzo de El Escorial, Madrid

TRONU MONTANÉ, Carla (Universidad Kansai Gaidai)

エル・エスコリアル王立修道院図書館所蔵の
17 世紀イエズス会士により日本語で出版された仏教詩
トロヌ・ムンタネー, カルラ (関西外国語大学)

Abstract:

The Library of the Royal Library of Saint Laurence of El Escorial in Madrid holds two seventeenth-century rare books published in Japanese by the Jesuits in Nagasaki, *Guia do Pecador* (1599) and *Royei Zafit* (1600). While the first is an abridged translation of a very famous Spanish book, the latter is a compilation of various abridged Japanese literary collections. My research objective is to study and translate into Spanish two Japanese poem collections connected to Buddhism which are included in the *Royei Zafit*.

En mis clases de Estudios Hispánicos de la Universidad Kansai Gaidai siempre menciono el Real Monasterio de San Lorenzo del Escorial, en Madrid, que es una obra ejemplar de la arquitectura renacentista en España construida a finales del siglo XVI por Felipe II (1556-1598) cuando trasladó la corte a Madrid. El edificio es conocido en Japón porque desde 1984 forma parte de la Lista del Patrimonio Mundial de la UNESCO. El monasterio está dedicado a San Lorenzo (225 - 258 d.C.) en conmemoración de la batalla de San Quintín y la coronación de Felipe II, que tuvieron lugar el 10 de agosto de 1557, que es el día en que se conmemora el martirio de San Lorenzo. Por eso el trazado del complejo tiene forma de parrilla, ya que San Lorenzo fue torturado y quemado vivo en Roma en una parrilla. La austeridad de su estilo rompió con las tendencias de la época y ejerció una gran influencia en la arquitectura española. A los alumnos les suele gustar, o por lo menos impresionar, por sus grandes dimensiones y su simetría. A mí me gusta destacar su biblioteca, llamada Escorialense o Laurentina, fundada por Felipe II en su afán de coleccionar libros, así como de cristalizar el ideal humanista del siglo de oro y las reformas del Concilio de Trento.



Entrada principal del Real Monasterio de San Lorenzo de El Escorial.



Izquierda: Vista de la Sala Principal de la biblioteca. Derecha: Retrato de Felipe II atribuido a Juan Pantoja de la Cruz (óleo ca.1590) y estanterías dóricas originales con los lomos de los libros hacia adentro para que el papel respire.

Imágenes digitales extraídas de: www.patrimoniounacional.es (7 de febrero 2024).

Entre su fondo de más de 400,000 manuscritos y documentos impresos, se encuentran dos libros impresos en Japón en el siglo XVII por la imprenta del Colegio de los Jesuitas en Nagasaki: *Gvia do Pecador* (Nagasaki, 1599) y *Royei Zafit* (Nagasaki, 1600). Los dos libros están impresos íntegramente en japonés, en *kanamajiri* (仮名まじり), es decir, combinando caracteres chinos *kanji* (漢字) y los dos alfabetos japoneses *hiragana* (ひらがな) y *katakana* (カタカナ). Sin embargo, en sus portadas el título aparece tanto en alfabeto latino como en alfabeto japonés. *Gvia do Pecador* – *ぎやどぺかどる* (*giya do pekadoru*) es una versión abreviada en japonés de *Guía de Pecadores*, escrito por el dominico Fray Luis de Granada en 1556, una obra de literatura devocional que exhorta a llevar una vida virtuosa. En su época fue un *best seller*, traducido a varias lenguas europeas y reimpresso múltiples veces, y hoy en día sigue siendo un clásico de la literatura cristiana del siglo de oro. *Royei Zafit* – 朗詠雑筆 (*rōei zappitsu*) es una antología de diferentes tipos de textos japoneses (poemas, epístolas y aforismos), compilados por los jesuitas como material didáctico para la enseñanza del japonés.



Portada del *Royei Zafit*.

©Patrimonio Nacional

Se conocen por lo menos otros dos ejemplares de *Gvia do Pecador* en el Reino Unido (Bodleian Library, Oxford) y en Italia (Biblioteca Nazionale Marciana, Venecia), que ya aparecían identificados en los catálogos europeos de libros japoneses a finales del siglo XIX. Sin embargo, del *Royei Zafit* no se conoce hasta el momento ningún otro ejemplar. Ambos libros de la biblioteca escurialense pasaron desapercibidos a los estudiosos hasta que en 1929 el sinólogo francés Paul Pelliot (1878-1945) los mencionó de pasada al final de sus notas sobre manuscritos y libros chinos en las bibliotecas españolas para una revista de estudios sínicos. Si bien ambos libros aparecen en los catálogos del siglo veinte, el hallazgo no dio lugar a estudios académicos de sus contenidos en occidente.

Independientemente, un año más tarde, el novelista y crítico literario japonés Kimura Ki (1894-1979) se encontró con los dos libros en El Escorial y los dio a conocer entre los académicos japoneses, dando lugar a la publicación de transliteraciones y ediciones comentadas en japonés, dentro de la tradición filológica. Los recientes avances en las técnicas de catalogación, digitalización y divulgación de libros raros y antiguos que proporcionan las nuevas tecnologías, y la consolidación de los estudios japoneses y la historia del libro en Japón hacen que no se pueda descartar la posibilidad de que en un futuro próximo se den a conocer otras copias existentes, pero de momento es un ejemplar único, sin duda de gran valor.

Es precisamente este ‘libro de texto’ lo que me llevó a la Biblioteca Laurentina. Sin duda, el texto más largo y más conocido de los cinco que forman esta antología es el primero, que consiste en la primera parte de una famosa compilación de poesía japonesa de la época Heian titulada *Wakanrōeishū* 和漢朗詠集. Sin embargo, el libro incluye otras dos colecciones de poesía japonesa, menos populares pero tan o más relevantes para investigar la interacción cultural y religiosa en la época moderna temprana en Japón, especialmente los contactos con el budismo en la misión jesuita de los siglos XVI y XVII. Se trata de las antologías *Kusōka* 九相歌 o *Poemas Japoneses sobre los Nueve Estadios* y *Mujōka* 無常歌 o *Poemas Japoneses sobre la Impermanencia*.



Folio 18r del Royei Zafit con el título 'Kusōka', el prólogo en prosa y las siete primeras waka. ©Patrimonio Nacional

Parece que ambas colecciones eran transmitidas oralmente en monasterios budistas dentro del proceso de formación de los novicios. Mientras que las *Mujōka* no han sido tan estudiadas, las *Kusōka* han atraído numerosos estudios porque entroncan con una larga tradición poética china y la tradición pictórica que se desarrolló en Japón en la época medieval sobre el mismo tema. Los nueve estadios a los que se refiere el título son los estadios de descomposición del cuerpo femenino después de la muerte. Aunque a partir del siglo XVII se encuentran libros impresos combinando imágenes y poemas, las imágenes circularon al principio independientemente de los textos, en rollos pictóricos *emaki* (絵巻) que se conservan principalmente en templos budistas. Se trata de imágenes creadas para ser utilizadas por los monjes budistas en prácticas meditativas de visualización de cadáveres (en lugar de su contemplación directa) para eliminar el deseo por el cuerpo

femenino. La tradición poética es de origen posterior y carece del aspecto grotesco y explícito que caracteriza la tradición pictórica. Indirectos y metafóricos, los poemas enfatizan el concepto de *mono no aware* (ものの哀れ), la impermanencia de todas las cosas en general y en concreto de la vida humana.

Cuando los académicos japoneses sacaron a la luz el ejemplar del *Royei Zafit* en El Escorial, todavía no se conocía ninguna otra versión impresa o manuscrita de esta colección anterior a la primera publicación japonesa de 1605, por lo que fue un gran hallazgo. Sin embargo, investigaciones recientes han sacado a la luz varias versiones manuscritas en Japón que presentan variaciones respecto al número y el texto de los poemas, lo cual sugiere que la colección como tal no se fijó hasta su primera impresión (por bloques de madera) en Japón en 1605. Así pues, la publicación jesuita de 1600 (por impresión tipográfica) nos muestra esta colección en un estadio previo a su consolidación y es de momento la versión impresa más antigua conocida. Traducir al español estas dos colecciones poéticas y aprender más sobre su función tanto en la tradición budista como en el contexto histórico de la misión jesuita es mi próximo objetivo de investigación.

編集後記

2023 年度の講演会開催にあたり講演者の皆様にはそれぞれのテーマを熱く語っていただきました。スペインとラテンアメリカを股にかけたバスク人の活躍や独立以後現代にいたるメキシコ先住民を通してみた多文化共生の困難さについて理解を深めていただけたなら幸いです。

一方、講演を円滑に開催できましたのも、ひとえに本センターのメンバーである若手からベテランの先生方、および図書館研究支援の方々の連携と協力の賜物です。ようやく体をなしてきたこの体制をさらに発展させていきたいと願うばかりです。

イベロアメリカ研究センター長 林 美智代

2024 年 3 月発行

発行 KANSAI GAIDAI UNIVERSITY

イベロアメリカ研究センター

〒573-1001 大阪府枚方市中宮東之町 16-1

TEL.072-805-2801（代表）

<http://www.kansaigaidai.ac.jp>